

未来ノート

-202Xの君へ-

バドミントン

のぞみ

奥原希望

父も驚いた本気

目標は常に書く

格上に負けない

絶対女王への道

負けず嫌い 二重跳び50分

「迷ったら、苦しい道を選びなさい」。相手のシャトルを拾いまくる奥原希望(22)の粘り強いプレーの原点には、父の圭永さん(59)の言葉がある。

北アルプスのふもと、長野県大田市で生まれた3人きょうだいの末っ子。物理教諭の圭永さんがバドミントン部の顧問をしていた大町北高校の体育館で、五つ上の姉や三つ上の兄とともに

に、小学1年でラケットを握り始めた。スキーマの指導員もしていた圭永さんは「本当はスキーマ選手にさせたかった」。冬は毎週ゲレンデへ。水泳やピアノも挑戦させた。その中で奥原はバドミントンを選んだ。「スキーは簡単に滑れて『あ、できた』って感覚がなかった。逆にバドミントンは難しい。今日はこれができたという達成感

があった」。小学2年で全国大会に出ると、のめり込んだ。父の指導は厳しかった。平日は1日1千球、土日は2千球を超えるノック。ミスをすればタッシュをさせられ、座って休めば「空き時間も有効に使え」と怒られた。苦しい表情をしても「あと1本」と求められた。奥原は「案をすれば自分のペースが下がっていく。苦しい道を選び続けければ、その先に何かが見えてくると言われてきた」。

娘も筋金入りの負けず嫌いだ。小6の冬、練習態度が気に入らなかった圭永さんに「やる気がないならやめろ」としかられた。「やる気はあります」と言い返した。「口ではなんとでも言える。態度で示せ」と言われると、自宅の廊下で裸足のまま、縄跳びの二重跳びを始めた。

50分が過ぎ、過呼吸になりながら跳ぶ娘を父は慌てて止めた。奥原の顔は汗でぐしゃぐしゃ、足には大きな水ぶくれができた。「この子になんてことを言ってしまったんだ」。父はこの「事件」をきっかけにスキーマの指導員をやめ、バドミントンの指導に専念する。それ以来、娘に「やる気があるのか」とは言っていない。



小学生のころの奥原=家族提供、インタビューに答えるバドミントン世界選手権王者の奥原=山本和生撮影

娘も筋金入りの負けず嫌いだ。小6の冬、練習態度が気に入らなかった圭永さんに「やる気がないならやめろ」としかられた。「やる気はあります」と言い返した。「口ではなんとでも言える。態度で示せ」と言われると、自宅の廊下で裸足のまま、縄跳びの二重跳びを始めた。

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。